

## 尺度使用マニュアル

### <尺度名>

日本語版抑うつ状態チェックリスト改訂版

### <測定概念>

抑うつ気分の 2 つの構成成分である、情動的成分と自己全般に対するネガティブな視点を測定する尺度。Teasdale & Barnard(1993)の ICS 理論では、抑うつ気分喚起場面において、抑うつに対して脆弱な個人には自己全般に対するネガティブな視点が経験されやすいと仮定されている。これは、特に自己を「全般的に」否定する視点が、ネガティブな思考やイメージといった認知的産物の生成を促すと考えられているためである。

### <適用範囲>

大学生を対象とした調査で尺度の作成が行われているが、他の属性のサンプルにも適用できるものと考えられる。

### <尺度構成手続き>

Teasdale & Cox(2001)は、抑うつ気分の 2 つの構成成分を測定する、抑うつ状態チェックリスト(the Depressive States Checklist: DSC)を作成した。これに倣い、長谷川・伊藤・金築・根建(2008)は独自に項目のプールを行い、DSC の日本語版(J-DSC)を作成したが、ネガティブな自己視点形容詞群が、自己を「全般的」に否定する内容の形容詞で統一されていないという問題点が示唆された。そのため、各構成成分を測定するのに適していると考えられた項目をプールし直し、改訂版の項目原案を作成した。41 項目の項目原案を大学生 336 名に対して実施し、探索的因子分析の結果を踏まえ、第 1 因子“ネガティブな自己視点形容詞群”，第 2 因子“情動形容詞群”から成る J-DSC の改定版(J-DSC-R)を作成した。

### <信頼性>

因子分析を行った上記の調査では、 $\alpha$ 係数が両因子共に.93 であった。

### <妥当性>

大学生 176 名に対して、J-DSC-R、抑うつ傾向を測定する日本語版 Zung 自己記入式抑うつ性尺度(SDS; 福田・小林,1973)、および抑うつ的反すうの頻度を測定する日本語版反応スタイル尺度(名倉・橋本, 1999)の“否定的考え込み”因子を実施した。また、SDS については、“認知的症状”と“情動的症状”の各因子得点を算出し、分析で用いた。J-DSC-R のネガティブな自己視点形容詞群と情動形容詞群について、お互いの因子の影響を統制した、認知的症状、情動的症状、否定的考え込みの各得点との偏相関係数を算出した結果、

J-DSC-R のある程度の構成概念妥当性が示された。なお、ネガティブな自己視点形容詞群得点と各因子得点との偏相関係数は.28, .24, .41(すべて  $p<.01$ )であり、情動形容詞群得点と各因子得点との偏相関係数は-.00(*n.s.*), .35, .23(共に  $p<.01$ )であった。

<採点方法>

“ネガティブな自己視点形容詞群” = 項目 1+5+7+8+9+11+12+15+18+19+22+24+25+28

“情動形容詞群” = 項目 2+3+4+6+10+13+14+16+17+20+21+23+26+27

<尺度の使用について>

各因子の構成概念の測定に適した形であれば、尺度を改変して使用することは可能。

<出典文献>

長谷川晃・伊藤義徳・金築智美・根建金男 (2008). 抑うつエピソード経験者と未経験者が喚起する抑うつ気分の構成成分の差異および量的差異 早稲田大学臨床心理学研究, 7, 35-45.

長谷川晃・伊藤義徳・矢澤美香子・根建金男 (2010). 日本語版抑うつ状態チェックリストの改訂 パーソナリティ研究, 19, 68-71.

<連絡先>

長谷川晃(東海学院大学人間関係学部心理学科)

Mail-address: mail-ad.of.hasse[at]tokaigakuin-u.ac.jp

URL: <http://island.geocities.jp/deprumination/>

<無料・有料の別>

無料。

<著作権関連情報>

出典を明記のうえ、ご自由にご使用ください。

<その他>

本尺度は、Teasdale& Cox(2001)で作成されたDSCの翻訳版ではない。これは、英語では情動形容詞群やネガティブな自己視点形容詞群とされている形容詞を翻訳しても、その訳語が該当する形容詞群の項目としてふさわしくないものが存在したためである(例えば、DSC 原版では情動形容詞群とされている“defeated”は、日本語では「打ち負かされた」、「挫折した」と訳され、この訳語はネガティブな自己視点形容詞群と見なした方が妥当である)。研究結果の国際比較ができないことを念頭においた上でJ-DSC-Rをご使用下さい。